

# 体のところの通信簿

## 子どものチック

### 接し方迷うときは受診を



ク。やらずにはいられないというムズムズするような感覚を伴うことが多いようで、脳の神経伝達物質のアンバランスが原因と考えられている。家庭の医学書などには、よく「日常生活で困ることがあれば医師の受診を」とある。どのような場合を指すのだろうか。

達は「癖だろう」ぐらいで慣れてしまう例が多い。「親が過度に心配することはない。でも、本人が苦しい、痛い、つらいとなったら受診した方がいいと思います」

チックを経験する子は10人中1人か2人、とされる。学童期には珍しくないし、多くは自然に症状が消える。医師から「様子を見ましよう」と言われる例が大半だ。

しかし「中には長引くチックもあり、最初の頃は一過性のものと区別がつかないのに、このことがきちんと伝えられていない」と、名古屋大病院・親と子どもの心療科の岡田俊講師は問題点を指摘する。1年以上続く「慢性チック」

は1000人に1人、慢性で複数の症状がある「トゥレット症候群」は10000人に1人程度いるのではないかと、という説もある。

症状の重いトゥレットの場合、病気の受け止め方や薬の使用など「チックとの付き合い方の工夫」が必要になってくる。こうしたことを知らないまま、どう対応していいか悩む親が少なくない。岡田さんは「経験のある医師に、症状がどのような経過をたどるのか、まず『見取り図』を指南してもらっては。チックが軽い場合でも、親に不安や迷いがあったら、気軽に受診してよいと思う」という。

幼稚園に通う次男が、頻繁に腕をピッと伸ばすような動作をする。風邪でもないのに、何度もせき払いをするし、少し以前には強いまばたきもあった。どうやら「チック」らしい。

「結構激しいチックでも、子ども本人は困っていない事例が意外とあります」。東京医科大病院小児科の星加明徳主任教授は言う。例えば、まばたきが多くても周りが気にすることは少ないし、せき払いの音が大きくても、親しい友

大切なのは子ども本人の気持ちを尊重すること。自分の症状をどう思っているか、学校の先生や友達にどんな風に説明してもらいたいのか、親にはどう接してもらいたいのか――。年齢相応の問いかけ方は医師がノウハウを持っている。まずは小児科に相談し、必要なら専門医を紹介してもらおうとよい。

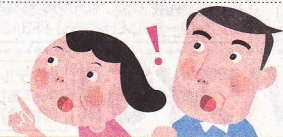
東大病院こころの発達診療部の金生由紀子部長は「変な感じがするのは自分だけじゃない、同じような子が他にもいるんだと、医師と話すことで安心してもらえらる面もある。家庭も含めて子どもが『安心感』を持ってこそ、その子に合わせた治療も可能になりやす」と話している。(吉田晋)

The Asahi Shimbun

### チックで「日常生活に困る」例

- ①  「アッ、アッ」といった鋭い声が出てしまい、周りの目が気になる
- ②  ①の声を抑えようと頑張ると、疲れてしまう
- ③  口を大きく開けるのを繰り返して口角が傷つく
- ④  激しく首を振るので、首や肩が痛くなる
- ⑤  食事中に手がピクッと動いて物をこぼしたり、腕が動いて字が書けなかったりする
- ⑥  子の症状は軽いが、親が今後を見通せず不安に思っている
- ⑦  子の症状は軽いが、親がどう接したらよいか迷っている

### ドクター星加の診断



①、②は音声チックの一つで、比較的軽度でもみられますが、最も受診や治療開始のきっかけになりやすい症状です。③～⑤は運動性チックといい、多くはひんぱんなまばたきに始まり、顔面から首、肩、手足へと広がります。例に挙げたのは、明らかに受診が勧められる状態です。もっと軽い症状で、生活していて特に問題を感じないなら、自然に消えるのを待って様子を見ても構いませんが、⑥、⑦のように親の側に不安や迷いがある場合は、子どももつらいと思っているかもしれません。気軽に医師に相談してください

患者・家族らでつくるNPO「日本トゥレット協会」(03・3200・5451、木曜午前10時～午後3時)は、会のサイト(<http://tourette-japan.com/>)で、「チックとトゥレット症候群がよくわかる本」(星加明徳監修、講談社、1260円)など参考書籍を紹介している。